



# きらつと教育

晩年を迎えたあるシスターは余暇を利用して随筆を書き始めました。過去を追憶しながら、あるいは、日頃から考えていることなどを気の向くままに書き留めた文章の中に「きらつと光る」教育的な示唆があります。

8回シリーズで紹介します。どうぞ、味わってください。

## 1 少年と犬

30年前のことである。大分の小百合愛児園（養護施設）に赴任したその日、子供たちに挨拶していると、どこからか子犬の泣き声が聞こえてきた。その瞬間、男の子たちの顔がさっとかわった。どうしてだろう。話が終わるやいなや、数名の男の子たちが一目散に運動場に向かって一斉に走っていた。私もその方向に足を向けた。たむろしている男の子たちが、私の姿を見て何やら隠そうとしている。

「あら、子犬。私にもだかせて」とたのむと、一人の子が「園長、犬好きかい」と大分弁で聞き返す。「ええ、大好き」、ほっとしたみんなの顔。「飼ってもええか」「いいんじゃない」と答えたものの、もしかしたらと、心配になった。この園は、動物はご法度かなあ。「明日まで待って、みんなに伺ってみるから」と言い聞かせた。動物禁止の園であった。動物も子供の教育に大切であること。それによって許可されることになった。こうして子犬は「コロ」と名付けられ、子供たちのアイドルになった。

ある日の午後、一人の子供が泣きながら犬小屋に走って行った。「おや、また喧嘩か」私はそっと犬小屋に行った。男の子はしっかり犬を抱きしめて泣いている。コロは男の子の涙と鼻をしきりになめていた。

親あって親なきのこの子供達。私がかつて兄弟喧嘩で負け、悔し涙を流していた時、母はしっかり私を抱きしめて、白い割烹着の裾で拭いてくれたのを思い出し、涙の雫を落としながら、「コロちゃん、アリガトウ」と感謝した。

その時、小屋の前を通りかかった先生が「きたない！小屋からでなさい」と男の子をしかった。この子の涙を拭いてくれるのはコロだけだ。「あなたがこの子の涙と鼻をなめてあげられるならば」と言って静かにそこを立ち去った。

ある夏の昼下がり、かつての男の子がアイス配っている私に、「園長、僕にアイス2本くれんか」、「なんで？」「コロが欲しがらんじゃ、なめさせるとな、全部、なめるんや」私は何と可愛い子、2本さあっとあげた。他の子に見つからないように。男の子は、右に1本、左に1本持って木陰に行った。男の子の顔をみつめて尾を振るコロに左の1本をなめさせ、右の1本は自分の口に。夏の昼下がりの美しい光景。優しい心に胸を打たれた。（シスターK.M）

